

たのは42%であった。一方で、CT上リンパ節腫大を認めない119例で7例にTBACで転移が判明し、手術前のリンパ節転移検索に有用である可能性が示唆された。気管分岐部リンパ節に対するTBACを施行した肺癌症例153例のうち肺癌の病期決定にTBACが有効であった症例は25例で全体の16%であった。外科的切除を行った49例の非小細胞肺癌症例では術後病理にて3例に気管分岐部リンパ節転移が判明した。手術症例におけるTBACの精度は94%であった。

〔結論〕

気管分岐部リンパ節のTBACは肺癌の病期診断に最小限度の侵襲で施行でき、かつ気管分岐部リンパ節転移診断に有用な情報をもたらすと考えられる。

### 論文審査の要旨

肺癌の治療選択には正確に病期診断することが求められる。縦隔リンパ節転移の有無は病期の決定に重要であり、経気管支吸引細胞診(TBAC)の有用性についての検討がなされた。CT上リンパ節腫大がありTBACで転移が確認されたのは42%であった。CT上リンパ節に異常なしとされた119例中TBACにより7例で転移を確認した。手術症例で確認されたTBACの精度は94%であった。この結果よりTBACは肺癌病期診断に極めて有用であることが知られた。以上より、本研究は学術的にも臨床的にも価値のあるものと評価できる。

62

氏名(生年月日)	カ トウ フミ ヨ代 加 藤 文 代
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第2465号
学位授与の日付	平成19年12月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	<b>Helicobacter pylori infection in children with idiopathic thrombocytopenic purpura and the efficacy of eradication therapy</b> (小児特発性血小板減少性紫斑病における <i>Helicobacter pylori</i> 感染の関与と除菌療法の有効性についての検討)
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌 第77巻 臨時増刊号 E40-E45頁 2007年
論文審査委員	(主査) 教授 大澤真木子 (副査) 教授 泉二登志子, 松岡 雅人

### 論文内容の要旨

〔目的〕

特発性血小板減少性紫斑病(ITP)の成人例では、*Helicobacter pylori* (*H. pylori*) 除菌療法の有効性が確立されてきた。しかし、小児ITPでは、発症後6ヵ月以内に治癒する急性型の症例が多いこと、また*H. pylori* 感染の検査感度が低いため成人に比し診断が困難であることなどから、*H. pylori* の関与については明らかでない。小児ITPにおける*H. pylori* 感染の頻度と除菌療法の有効性を検討した。

〔対象および方法〕

対象は2000年7月から2006年6月までの6年間に東京女子医科大学東医療センター小児科でITPと診断され、6ヵ月間以上の経過観察が可能であった25(男児15, 女児10)例、発症年齢中央値2.8歳(3ヵ月~14歳)である。対象を急性型ITPと慢性型ITPの2群に分け、発症年齢、先行感染の有無、初診時および最低時の血小板数を後方視的に比較検討した。さらに、慢性型ITP例では、便中*H. pylori* 抗原、尿素呼気テスト、または血清抗

*H. pylori* IgG 抗体の検査を施行し、*H. pylori* 感染の有無を検討した。*H. pylori* 感染を認めた症例では amoxicillin, clarithromycin, proton-pump-inhibitor の 3 剤を 14 日間使用する除菌療法を行い、治療前後の血小板数の変化を検討した。

#### 〔結果〕

急性型が 14 例 (56%)、慢性型が 11 例 (44%) であり、後者は前者と比較し女兒に多く発症年齢が年長である傾向を示した。先行感染の有無、血小板数は、両群間に有意差を認めなかった。慢性型 ITP では、11 例中 3 例 (27%、男児 1、女児 2) において *H. pylori* が陽性であり、同 3 例に対し除菌療法を行った。全例で除菌は成功し、1 例 (慢性 ITP の 9%、ITP 症例中 4%) において治療開始 3 ヶ月後から血小板が増加し完全寛解となった。2 例では除菌療法後 2 年以上観察するが血小板数の変動を認めなかった。除菌療法の副作用は認めなかった。

#### 〔考察〕

酒井らは 15 歳未満発症の慢性 ITP40 例で *H. pylori* を検査し陽性者は 2 例 (5%) に過ぎないと報告した。しかし、判断に用いた血清抗 *H. pylori* IgG 抗体検査は、年少児では偽陰性になることもあり、そのため低い感染率となった可能性がある。成人 ITP における *H. pylori* 感染の頻度は一般人口の感染率と同率であり、ITP で高率に認められるわけではない。本研究で、小児慢性 ITP における *H. pylori* の感染率が 27% であったが、日本人小児の一般的な *H. pylori* の感染率は 10~20% と報告されており特に高率ではない。一例では除菌後に明らかに状態が改善した。

#### 〔結論〕

本研究では、小児 ITP においても *H. pylori* が関与する症例が認められ、一般的治療に不応な小児慢性 ITP 症例では除菌療法も考慮すべき治療法のひとつと思われた。

## 論文審査の要旨

本論文では、小児の特発性血小板減少性紫斑病 (ITP) における *H. pylori* 感染の頻度と除菌療法の有効性を検討した。2000 年 7 月から 6 年間に東京女子医科大学東医療センター小児科で ITP と診断され、6 ヶ月間以上の経過観察が可能であった例を対象とした。急性型と慢性型 ITP の 2 群に分け、発症年齢、先行感染の有無、初診時および最低時の血小板数を後方視的に比較検討した。また、*H. pylori* の感染を認めた例では除菌療法を行い、治療前後の血小板数の変化を検討した。先行感染の有無、血小板数は、両群間に有意差を認めなかった。慢性型 ITP では、27% において *H. pylori* が陽性であり、除菌により改善を認めた例があった。本研究では、小児 ITP においても *H. pylori* が関与する症例が認められ、一般的治療に不応な小児慢性 ITP 症例では除菌療法も考慮すべき治療法のひとつであることを明らかにした。その点で価値がある。